

## 大陸から見た3世紀の日本列島

2022年2月20日

我部山 民樹

### 1. はじめに

邪馬台国に興味があったが、それほど調べてきたわけでは無い。テレビ番組、「2021 邪馬台国サミット」を視聴した。魏からの女王・卑弥呼への使者の進行した方角が南と書かれているが、実際は東だったが誤認しただけとする畿内説、南に進行したが、行程の単位を間違えただけとする九州説。ほとんどが考古学上の議論に終始し、お互いに主張を譲らなかったと記憶している。

その時に邪馬台国に至るルートとその根拠に関する議論が無く不思議に思った。勿論、考古学的に発掘物を実証することは必要だろうが、魏の使者らが女王国の都・邪馬台国へどのようなルートで辿ったのかの特定が必要だろう。倭王が東遷により都を遷していった可能性、複数の王権が交代した可能性も否定できないので、倭の王国の都は複数あった可能性も否定できないと思われる。九州や畿内その他に都があったかもしれない。魏志倭人伝に書かれた使者らが訪れた女王・卑弥呼の都・邪馬台国は一つである。



我々が認識している日本列島の地理と当時の認識は異なるはずであり、それらを押し量った上でルートを想定し、女王国の都・邪馬台国の位置を特定できないのだろうか。魏の使者らがどのルートを辿ったのか不思議に思い、ネットで調べたが諸説が多過ぎて、その主張の根拠が理解できないものもあったので、3世紀に晋の官吏・陳寿によって書かれた魏志倭人伝の現代語版を調べてみた。使者らが倭国の末盧国（まつろこく）に入ってから、一定の角度（90度程度）を誤認していることが分かった。太陽の軌道は毎日のように確認しているはずなので、倭国内の方角はすべて同程度の誤認だろう。魏と九州の位置により太陽の軌

跡による方角判断が異なるが、それによる誤認以外にも要因がありそうだ。陳寿は使者らの記録をそのまま踏襲しただけであろう。それで倭人伝に書かれていることは角度以外に間違いが無いとして、角度のみ修正して、読み替えなしで「邪馬台国論争における日本列島の認識問題」を書いてみた。いずれにしても魏の使者らの辿ったルートは特定しなければならない。



- 末盧国→伊都国の方角が東南方向と書かれているが、実際には東北東(60~70度)
- 伊都国→奴国の方角が東南方向と書かれているが、実際は東北東

その後、図書館で借りた 1997 年度版の前之園亮一著；「古代史の謎」を読んで、‘過去に室賀信夫氏の「日本列島南転（南延）説」が議論され、結局は批判され、否定されたことを知った。その後、「日本列島南転説」は議論の対象から外れたのだろう。このことは邪馬台国の専門家や興味のある人には常識だったのである。

それは‘1402年に朝鮮で作られた「混一疆理歴代國都之圖（こんいつきょうり・れきだい・こくとのおず）（龍谷寺）」（‘混一‘とは世界の混然を一体化）など朝鮮や中国で製作された古地図に日本列島は方位が倒錯して九州が北に、畿内・東北が南に描かれ、中国福建省へ長く伸びた形に描かれている例を示して、陳寿も日本を実際より 90 度南転した地理観を持ち、大和の邪馬台国を九州の南にあると考えていたので、「南」を東の誤りとして修正せずとも大和へ至ることができる」との主張であるが、有力な反論がなされている。‘ということである。もっと知りたいと思い、ネットや図書館で検索したが分からなかった。この本の著者・前之園亮一氏と同姓同名の方が近所にお住まいと分かり、訪ねてみたら幸いなことにご当人でした。そして 2008 年度版安本美典著；【「邪馬台国畿内説」徹底批判】とそのほかの邪馬台国絡みの蔵書 40 数冊をお借りすることができた。さらに分かったことは、以下である。

#### ○混一疆理歴代國都之圖

この地図は、いずれも明の建文 4（1402）年、李氏朝鮮で作成されたもので、現存最古の世界地図。地図の下段に記される由来によると、朝鮮使として明に派

遣された金士衡という官僚が、1399年に2種類の地図を国へ持ち帰った。それは李沢民の『声教広被図』と、仏僧である清濬の『混一疆理図』で、それらを合わせ、さらに朝鮮と日本を描き加えて、建文4(1402)年に完成したものであるとする。地名等の調査により、永正10(1513)年から天文17(1549)年または永禄10(1567)年から文禄元(1592)年のいずれかの期間内に成立したものと考えられている。

●龍谷寺所蔵の混一疆理歴代國都之圖

(龍谷寺所蔵、朝鮮製)

中国から手に入れた地図を基に朝鮮で描かれたとされる。

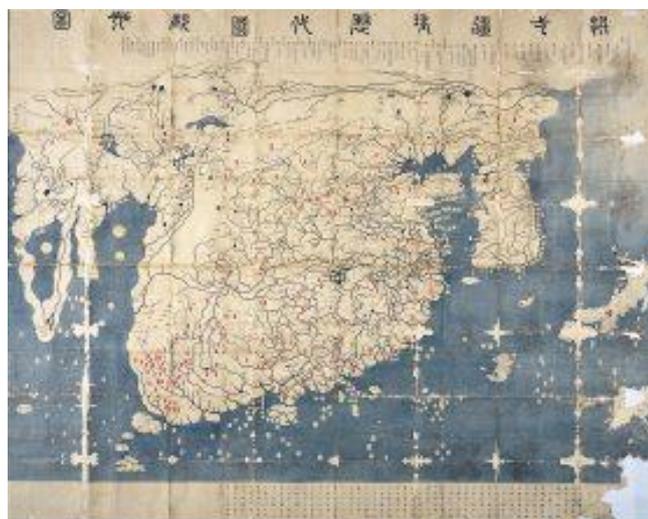
(龍谷図)



●本光寺所蔵の混一疆理歴代國都之圖

(島原市本光寺所蔵、朝鮮製)

(本光図)



混一疆理歴代國都之圖より日本列島の箇所を模写拡大した図



‘日本列島の向きが異なる事の異論として、’「龍谷図」の編者が朝鮮半島と日本との正しい位置関係を知らなかったとは思えない。地図の余白が無かったからではないか‘との説もある。

果たしてそうだろうか？確かに「行基図」を描き入れたのかもしれないが、中国から入手した地図には日本列島が描かれていて、従来の認識の通りに南北に描いたのではないか？世界の片隅の列島なので、躍起になって実体を探っていなかったとしても不思議ではないので、過去の情報で描いてしまう可能性はある。その後、羅針盤の普及により日本の新たな地理情報が得られるようになって、それが相前後して朝鮮半島に伝わってきたので、その後「本光図」のように修正したのではなかろうか？両図が描かれた時間差はほんのわずかだったのである。

本図はフビライ・ハン（～1294年）が描かせた地図がもとになっていると本光寺には伝わっているようだ。地図には「1293年に海道が始まる」と書かれている。海路、大河、運河を活用した、全世界を舟で結ぶ海道ということのようだ。参考にした地図はフビライ・ハンの世界戦略のための地図だったのであるか？

「日本列島南転説」に対する反論は妥当だが、大陸の日本列島認識についてはどのように捉えて、方角や行程をどのように解釈するのかについては触れていない。他の文献に書かれているのかもしれないが、まだその論文に行きついていない。

他に史料が無いようなので、魏志倭人伝を読み解いて当時の地理認識を憶測し、それにより魏志倭人伝を読み解く試みが必要であろう。どのように読み解くのか？

お借りした資料は邪馬台国論のほんの一部だろう。読み始めたところだが、とても量が多いのですぐには読み切れない。今後の楽しみとしたい。

## 2. 検討に際しての留意点

○中国の冊封体制と外交上の背景を考慮する。以下、引用する。

【秦、漢の時代から、中国民族は中華思想を持ち、冊封（さくほう）体制が出来た。異民族の君主はすべて、優れた文化を持つ中国を治める皇帝の支配を受けねばならず、皇帝は異民族の君主に対して、王号や称号を与え、印授を授けることによって支配した。（冊封体制と言う）。

238年、卑弥呼は魏に朝貢の使いを出し、魏は卑弥呼を「親魏倭王」に任じ、金印を与えた。当時、魏は呉と敵対していたが、呉と通じている隣接の朝鮮半島を牽制するための遠交近攻策の意味があった。そして有事の際に倭国の軍事的な行動を期待していたのだろう。】

魏は倭国が実際より南の位置・会稽郡の東にあり、呉を挟めると考えていたので、それで余計倭国に期待したのであろう。位置の誤解はおそらく距離の測定技術が発達していなかったことが原因で、朝鮮半島の南北の距離、半島から末盧国までの距離を過大に理解したためであろう。しかも南北に広がっていると考えていたようである。

一方倭国においては、邪馬台国は敵対する狗奴（くぬ）国などに対して、魏を後ろ盾にしようとする意図があったのだろう。また、半島における倭国の立場を有利にしたいとの意図もあったと推測する。

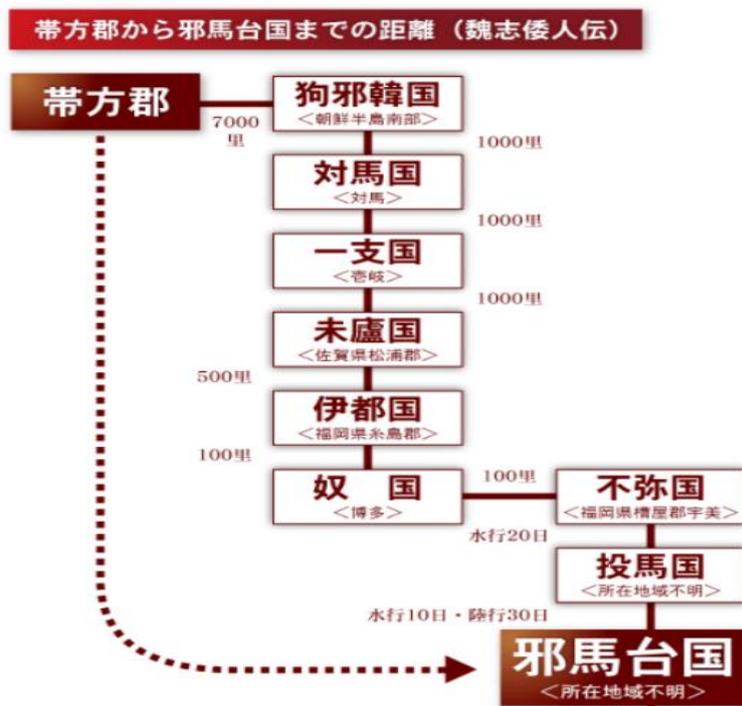


- ・会稽郡東治の東
- ・帯方郡の南東

### ○距離の測定精度

陸上の距離は歩測できても海上の距離の測定方法はなかった。推測だが、海岸沿いを歩測で距離を測定し、水行日数と相関で算出していたのだろう。そうだとすると潮の流れや風の影響で、精度は低くなるだろう。距離も100里、500余里、1,000余里、7,000余里と大まかである。100里以内は100里、1,000里以上は1,000里飛ばしであり、日数も10日、20日、30日（一月）程度の精度である。距離の単位は魏時代の長里の一里がほぼ440mで、短里が70~90mだが、いずれも辻褄が合わないようだ。

素直に読めばルートは次のようになる。



釜山から博多までの直線距離が230km（釜山港～対馬土居ヶ崎～舟腰浦～壹岐勝本～博多は66+34+60+60=229km）である。3,000里とすれば、1里が約80mであり、短里に合致しているようだ。しかし、倭国が会稽の位置だとしているので、その場合は釜山港から約450kmとなり、1里は約150mとなる。

### ○方角

いずれにしてもそれほどの精度はなさそうだ。

方角の測定技術は未発達であった。羅針盤もまだ発明されてなく経度も不明確で、天文学もそれほどではなく経度もおぼろげで、一般には太陽や月の軌道でおおまかな方角を決めていただろうし、日の出や日の入りは地域と季節で異なることを斟酌すべきで、方角が間違いとして一概に無視すべきではない。角度を誤認した背景を推定し、補正して読み解けばよい。

アジア最古といわれる 700 年頃のキトラ古墳に描かれた天文図は北緯 34 度付近の長安辺りで見た天体といわれる。それは現代の天文学により特定できる。いずれにしろ、天文図は倭のものではなく、大陸に頼っていたのだ。この時代でも日本列島では天文学は発達していなかった。3 世紀は推して知るべきだ。天文学が発展してくるとその緯度の精度が上がり、羅針盤が発明されて、その経度が分かるようになり、位置が特定されるが、羅針盤の発明は 11 世紀まで待たねばならなかったし、普及したのはもっと後のことである。

魏の使者らは天文学者でもないし、日本列島の位置や姿を特定するのを目的にしていないので、都・邪馬台国への向かうために太陽の動きで方角を大まかに判断し、それを記録したのだろう。各所の相対的な方角は信頼できると思われる。

「春分の日」「秋分の日」の「日の出」は真東、「日の入り」は真西。「冬至の日」は「日の出」が真東よりも南寄り、「日の入り」も真西よりも南寄りであることが分かる。さらに「夏至の日」の「日の出」は真東よりも北寄り（南と反対寄り）、「日の入り」は真西よりも北寄り（南と反対寄り）。

### ○3 世紀における日本列島の地図

おそらく 3 世紀には我々が思い描くような地図は無かったのだろうが、見つからない。そのため 3 世紀末頃に晋の官吏・陳寿によって書かれた魏志倭人伝の邪馬台国の場所がいつになっても特定されない。それについては驚くほどの多くの諸説があり、中にはまさかと思われる説もあるが、九州説と畿内説に絞られ、その論争は激しさを増している。論点は種々あるが、まずは魏志倭人伝に書かれた方角、行程（距離）が実際の地理にそぐわないということと発掘物等による考古学で実証できないということのようであるが、まずは魏の使者らが辿ったルートだが、当然、3 世紀の地理認識は今とは異なるので、それらを斟酌した上で読み取る必要がある。発掘物は今後も出土されるので、それを加味して考古学的に邪馬台国の場所が実証されていくのだろう。

○魏の使者らの辿ったルートを特定できれば邪馬台国の場所は特定できる。魏志倭人伝により当時の地理認識を想定して、考古学的にその裏付けができれば、この論争は収まるのではなかろうか。

○2 種類の 15 世紀の混一疆理歴代國都之圖（こんいつきょうり・れきだい・こくとのず）がある。当然これらは 3 世紀の地理認識とは異なるので、それを根拠に邪馬台国の自説を主張するのも、あるいは批判するのも無意味だが、参考になる。11 世紀に羅針盤が発明されても 15 世紀の日本列島の姿は混沌としていたのだ。龍谷図の日本列島図は単に描き間違っただけではなく、このような地理認識がこの時代まで続いていて、その認識で 1402 年に描いたのだろう。11 世紀の羅針

盤の発明により新たな列島の姿を知るように、やっこの時代に朝鮮半島に伝わってきて、その情報を折り込んだのが「本光図」ではなかろうか。

例えば、日本列島の地理概念を知らない子供たちに、大陸と朝鮮半島の地図と、切り取った日本列島の図を渡し、朝鮮半島の南端から最も近いのが北九州で、帯方郡の東南で会稽の東にの位置を指定し、その先の大阪や東京は、そこから段々遠くなるとの条件を付ければ、どのように列島を置くだろうか？ほとんどの子は北九州を北にして列島を南北方向にするのではなかろうか？少なくとも現在の地図に近いように配置する子はいないのではなかろうか？実態を知らない3世紀の大陸の大人たちも、同じように考えたのではなかろうか。博多辺りが会稽の東だと認識すると北方向に広がると、半島にもっと近づくことになる。

魏志倭人伝からは当時、地図は無かったにしても、例えば模式図のような資料があったと憶測する。魏の使者が女王国の都・邪馬台国を訪れる以前から大陸と倭国の間で交流・交易があり、倭とは以前より往来があったので、使者らは誤認があったにせよ、九州や西日本の地形のイメージをおぼろげながら描いていたのだろう。倭国側でも例えば王国が東遷しながら、従属してきた国々を模式図か何かに表記した資料を持ち、それを大陸側に渡していた可能性もあるが、食うか食われるかの時代、戦いを念頭に於いた国王や皇帝らにとって極秘事項だったので、お互いが容易に情報を出していたとは思えない。単なる憶測だが。

### 3. 魏志倭人伝を読み解くために

○自分が使者の立場だったらどのように選択するかを常に念頭において、容易に移動できるよう自分なりにベストの方法を考える。自説のために強引な解釈をするのは適切ではない。議論のための議論は避けるべきである。

○当時の交通手段の中で、出来るだけ容易に移動できる手段を選択するはずである。当時は海や川を舟で移動するのが最も有利である。多数の人を同時に荷物と一緒に、楽に、しかも速く運べるのだ。大陸では牛馬も利用できたが、倭では牛馬がいないと書いているので、舟を最大限に活用するはずである。倭人も牛車が無かったので舟での移動を出来るだけ活用していたはずだ。

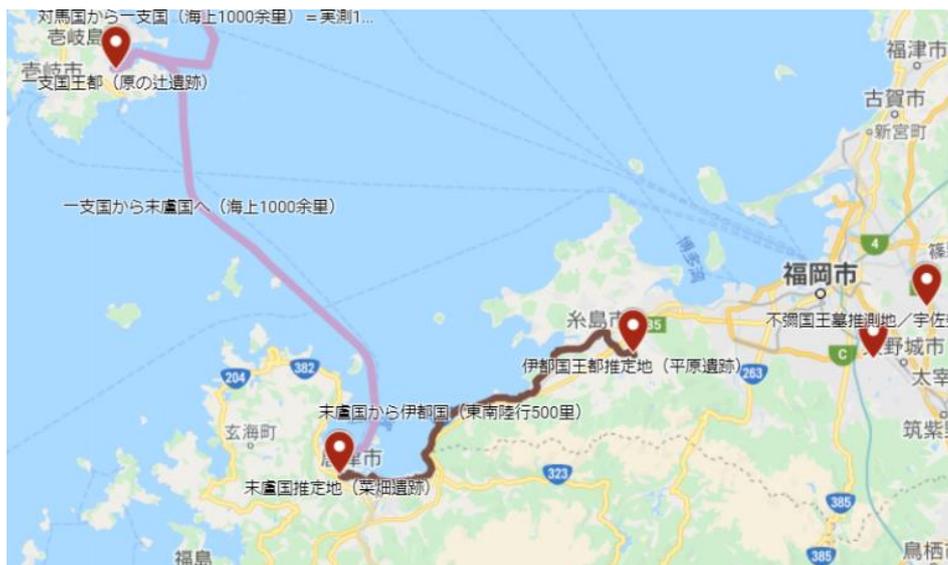
○帯方郡から陸路ではなく、海路で移動している。比較的平坦な半島の移動は陸路のほうが近くて容易だっただろう。牛馬も活用できたはずである。しかし魏と半島の関係、倭国と半島の関係が良好でなかったとすれば、陸路は選択できなかった。

魏の使者らは倭人や渡来してきた大陸の人々により倭の船で案内されたと想定する。

○歩行の場合の当時の道路事情はどうだったか？港から末盧国への移動は「草木茂盛し、行くに前人を見ず」とある。歩行は困難であり、荷物は担ぐしかなか

ただだろう。ある程度道路が整備されたのは後世のことである。伊都国まで水行する方が便利だったはずである。

港から末盧国までの道は比較的、往来が多かったとすれば、他の道の状況は推して知るべきである。それゆえ、陸行の場合は、出来るだけ整った道を使っただろう。少なくとも上陸地から都・邪馬台国への道路はそれなりに整備されていた街道、今日古道と呼ばれている道を利用したと推測する。



○魏の使者の見聞した風景や倭人の習慣と過去の訪問者の見聞した記録とは識別しなければならない。また通年の風景、長きに渡る風習、あるいは過去のものと思えるような記述はこの時の魏の使者以外と考える。それを混同すると解釈を誤ってしまう。

○伊都国には女王が命じた「一大率」(官命)が常設されており、使者らが立ち寄る必要があった。

○伊都国から奴国

直接伊都国の港に舟をつけることも出来たはずだ。だが、仮定の話として末盧国～伊都国のルート上に一大率があるので、その訪問のために末盧国に舟を着けたのだろう。



伊都国から投馬国に移動することも選択出来たはずだが、奴国に陸行している。伊都国は帯方郡使が常に一時駐（とど）まる所と書いてあるので、その駐屯地が奴国への途中にあったのだろうか？

- 奴国は伊都国の東北東・不弥国は奴国の北と読み替える。
- 一大率は末盧国と伊都国の中間にある。
- 帯方郡駐屯地が伊都国と奴国の中間にあると仮定すれば、このルートを選択は理解できる。

#### 4. 魏志倭人伝から判ること（ルートに関する）

- ・倭国は帯方郡の南東に位置する。
- ・倭国は会稽郡東冶に東に位置する。
- ・伊都国は末盧国の東南陸行五百里に位置する
- ・奴国は伊都国の東南百里に位置する。
- ・不弥国は東百里に位置する。
- ・魏と通ずる倭国の国は三十国
- ・南、投馬国に至る水行 20 日、女王の都・邪馬台国には水行 10 日陸行一月（方角は記載されていない）
- ・邪馬台国は 70,000 余戸
- ・魏の使者らは女王卑弥呼（247 年ごろ死没したとされる）の死の直前に訪問したと想定される。径百余歩（約 150m）の大きな墓が作られた。（一步=6 尺、1 尺=24 c m）
- ・女王国の以北に一大率を置き、伊都国に治す
- ・女王国の境界ある奴国の南に位置する狗奴国が女王に属しなくて敵対している。
- ・女王国の東、海を渡る事千余里、侏儒国がある。（北と読み替えると隠岐の島？）
- ・3 世紀の倭国に牛馬がない。

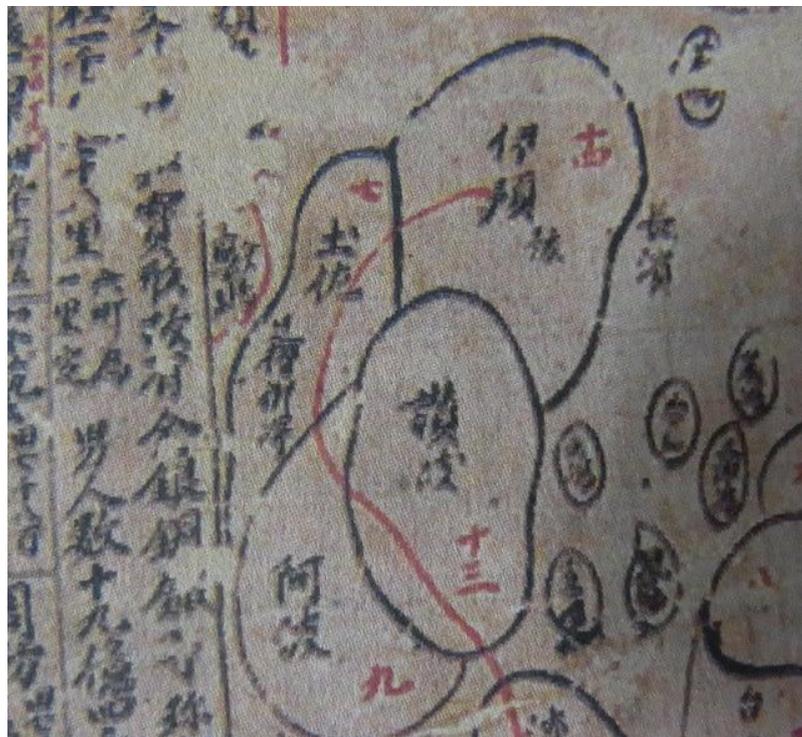
虎等がないというのと並列に書かれているが、牛馬に関しては移動手段や農作に牛馬が利用されているのを見たことがないということと解釈できる。

牛馬がいなければ陸行は歩くしかなく、荷物は荷車で運ぶか担ぐかであり、道路も整備されていないので、陸行は時間がかかり、不便である。

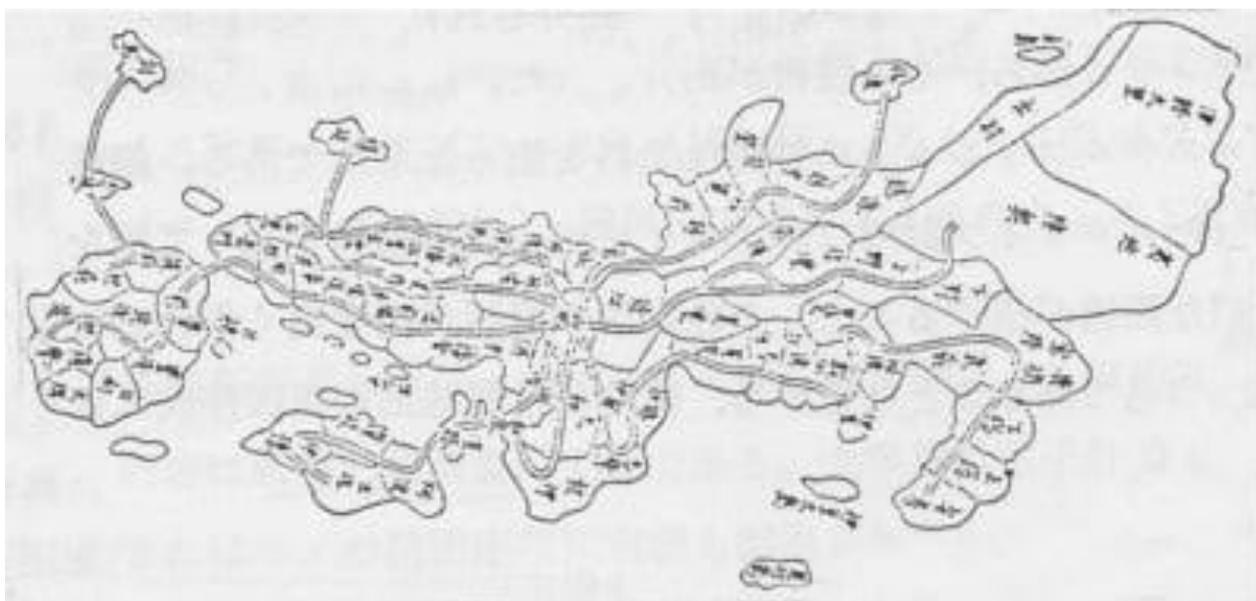
#### 5. 日本列島の地理認識の流れを整理する。

8 世紀の行基が最初に日本地図を作成したと伝えられているが、現存していない。真偽のほどは不明。それ以降の地図を行基図と呼んでいる。模式図も存在する。

模式図の例

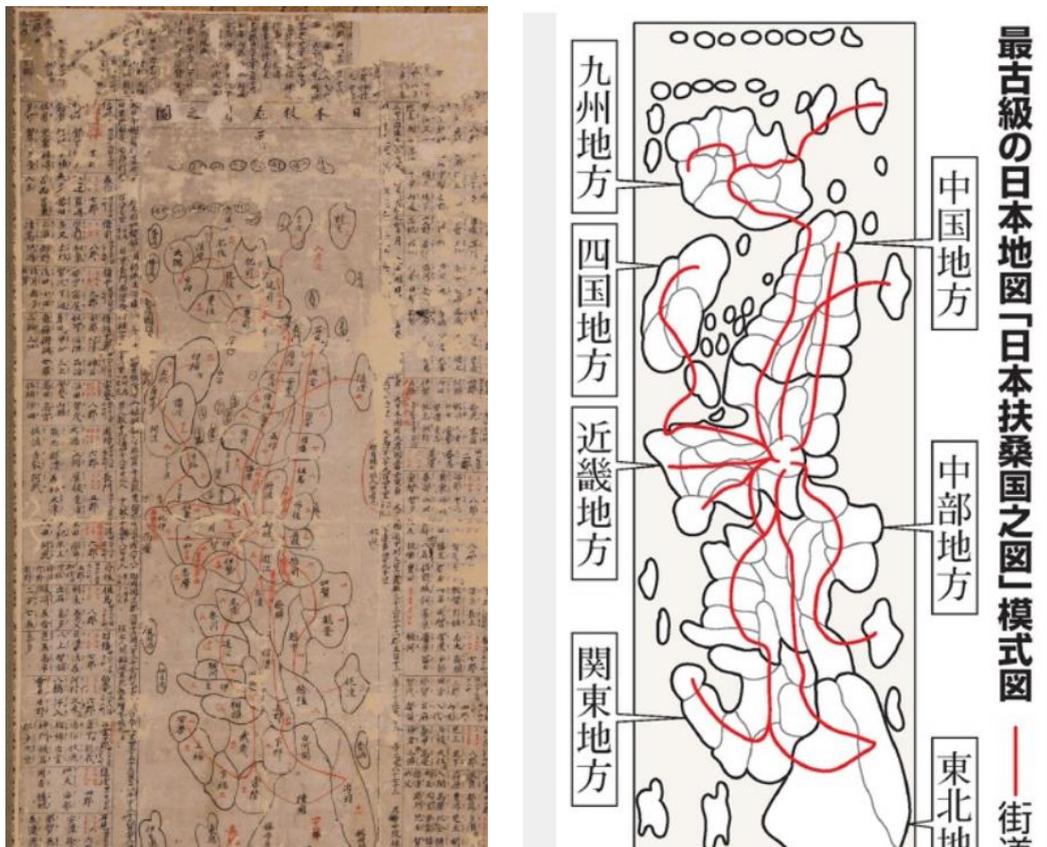


① 14世紀初頭に行基図(拾芥抄)



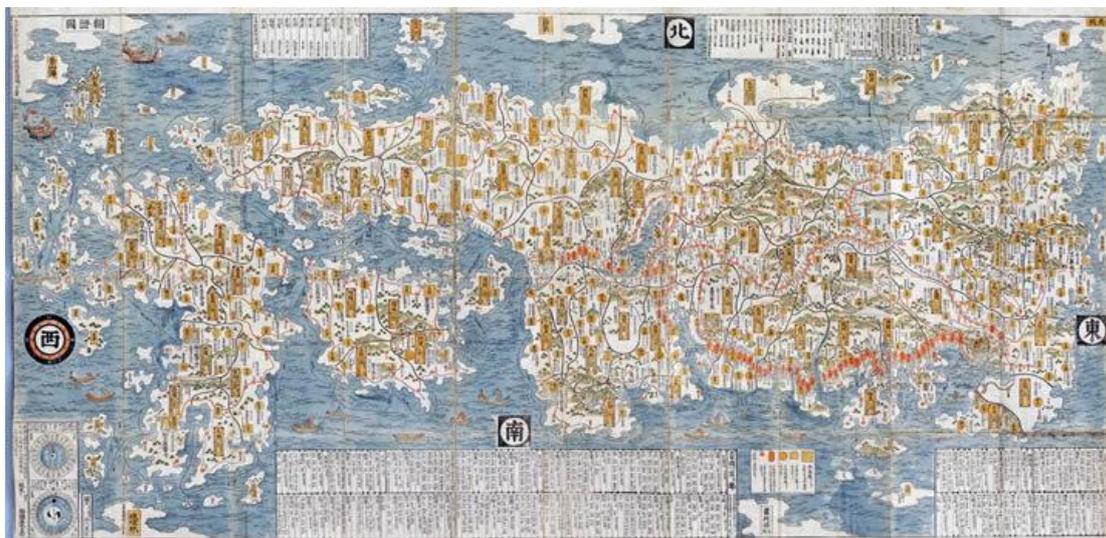
江戸時代初期まではこれが使われていた。

② 14世紀の日本扶桑国之図（模式図）

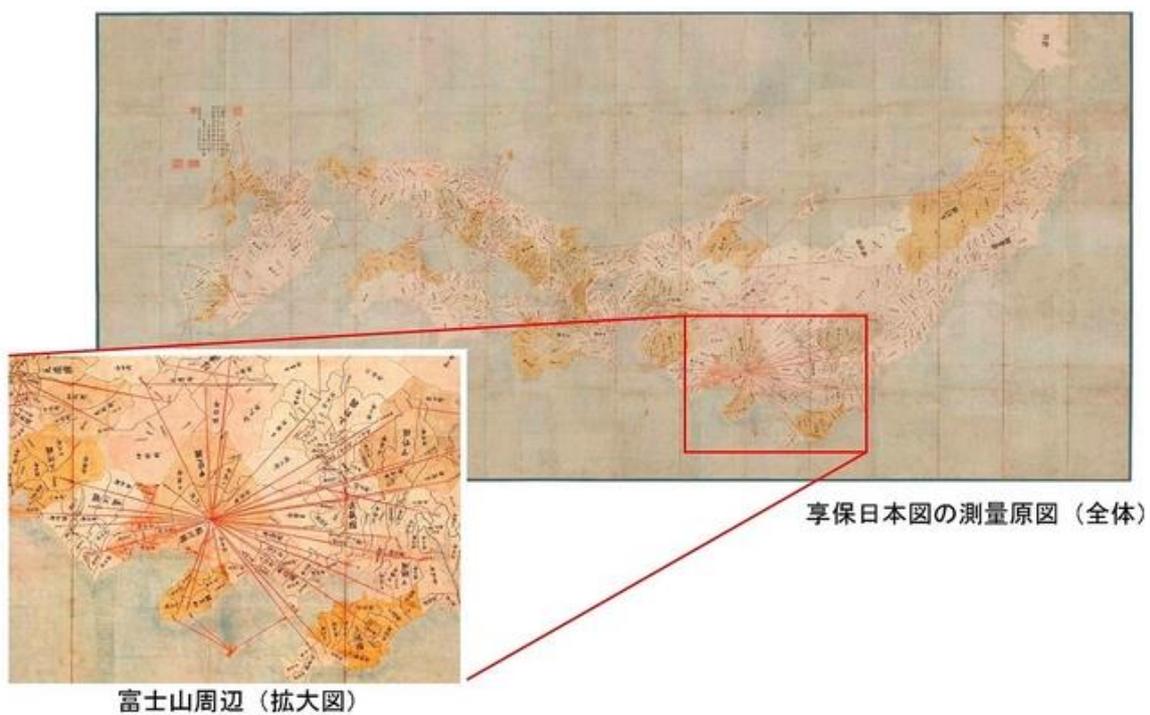


この時代でも地図ではなく模式図が存在した。

- ③ 江戸時代初期の寛永日
- ④ 正保日本
- ⑤ 1702年の元禄日本図



⑥ 1717年の享保日本図（日本初の全国測量で作成された）



新井白石が邪馬台国論争に用いた日本図と思われる。

⑦ 19世紀初頭の伊能図



現在の日本地図とほとんど差異が無い。

## 6. 検討に際して

・魏志倭人伝は、女王への使者の情報だけでなく、多くの人々の報告や伝承をまとめたものであろう。使者らの報告を識別しないで全てを使者らの見聞と報告としてしまうと実体が見えなくなってしまう。

例えば、倭国の範囲、大陸と倭国の位置関係の認識であるが、使者らの報告ではない。1世紀(57年)、倭王に金印(見つかっていない)を授けているように、以前より大陸の人々は北九州や西日本の日本海沿岸は交易があり、九州と西日本辺りを倭国と認識していたのだろう。投馬国は以前より交易があり、知っていたので書いたが、ほかの立ち寄り場所は知らなかった。投馬国は出雲であろう。関東地方、ましてや東北地方の認識はなかったであろう。会稽郡(長江の河口)の東に位置するとの認識は使者を派遣する以前のものである。魏から見て倭国は敵対する呉のバックサイドに位置し、さらに南北に広がった国と誤解していたので、呉との対抗上、倭国と組むのは有利と判断し、使者を送ったと考えられる。倭国は有利になるように魏の誤解を助長させたのかもしれない。また強大な大陸の国に倭国が侵略される恐れもあり、都・邪馬台国へのルートや位置を教えたくなかったのも、都に付随する情報は故意に外して流したのかもしれない。軍事上、瀬戸内は絶対に教えたくないルートだ。天智天皇や徳川幕府もここからの攻撃を恐れて対処した。

・伊都国等の北九州までの旅程は使者の訪問以前にデータがあったものである。大陸の海岸線の水行日数と陸上の距離の相関データがあり、それを用いて水行距離をはじき出していたのだろう。潮流が異なるので、必ずしも一致しないだろうが。対馬国→壱岐の島の136kmが水行1,000余里、壱岐の島→末盧国の47.5kmが同じ1,000余里となっている。千里飛ばしの行程だろうが、それにしても実際の距離が2倍以上の差異であり、精度は乏しいと言える。

思い付きだが、五百里以上千里未満が5百余里、千里以上2千里未満が千余里だろうか？

・伊都国から邪馬台国に至る道のりや方角を伊都国で得たとの説があるが、それだからと言って鵜呑みにはしないだろうし、いつ侵略してくるかもしれない強大な大陸の大国に、手の内を見せたくは無いらしい、見せるはずがない。都・邪馬台国に案内しても、その位置は教えたくないはずだ。むしろ虚偽の情報にて惑わせたのではなかろうか？使者らは自らの手法による方角、歩測の距離、所要日数を報告したはずである。あえて言えば、魏の使者らは、腑に落ちないことがあっても、皇帝の認識する倭国の姿を踏襲して報告する方が無難に思ったのかもしれない。何の根拠もないが。

・彼らにとって九州から邪馬台国に向けて水行と陸行で移動するのは初めてのことだろうし、使者らは水行日数をそのまま記載したと解釈できる。

・倭の風習や景色は使者以外の情報が多いだろうし、それで使者の訪問季節を推測することは無意味だろう。それ以前の情報が魏志倭人伝に含まれているだろうから。

・3世紀後半に陳寿が魏志倭人伝を成立しているので、この史料に基づく。それ以降の史料はその後の情報で修正・加筆があると思われるので、参考にすることがあっても検討に入れない。

・陳寿は魏の使者の報告、倭に関する伝承、倭国と交易・交渉あるいはそのために末ら国を訪問した人の報告をベースに書いている。

・帯方郡から末ら国までの行程は日数ではなく、距離で表示している。海上の距離を測定する技術は無かったので、恐らく、大陸の海岸線での水行日数と陸上の距離との相関データをベースにしたものと推測するが、現在の実測データに比して数倍の距離になっていて精度は悪い。そのため北九州が実際より南に位置すると誤解したものと推測する。九州や西日本が倭国と認識している大陸の人々は、倭国が会稽郡（長江の河口、上海を挟んだ地域）東冶の東にあるとしたのであろう。

・方角は太陽の動き、日の出と日没の位置で、割り出していたものだろうが、季節により、また場所により方角は異なる（倭国と魏では異なる）。使者たちは天文学の専門家でもなく、日本列島を探りに来たのではないだろうから、方角が大まかになったとしても不思議ではないし、倭人に惑わされたのかもしれない。

・末ら国から伊都国の移動は歩測で距離を割出すことが出来る。伊都国までは過去のデータかもしれない。伊都国は末盧国から東北東に位置し、伊都国のある糸島半島は視界内であるが、南東に位置すると書かれている。この段階で既に方角は60～70度の誤差を生じている。太陽の運行が季節の違い、場所（魏と北九州）の違いで方角が異なるが、それだけでなく、何かの先入観にとらわれたのかもしれない。

・南に水行となっているが、60～70度の誤差を前提にしても、列島の海岸線に沿って移動すれば進行方向は南南東になるが、それを南と勘違したのは分からない。魏と末盧国では日の出の位置が異なるので、方角は修正しなければならない。倭国に入ってから倭の役人に方角を尋ねたはずだ。倭国の都の位置を教えたくないばかりに意図的に異なった方角をささやいたのかもしれない。使者らは本当に南下していると思いついたのは間違いなかろう。その前提で検討すべきである。

九州説を主張するために、強引に伊都国の南東方向に奴国の候補地を想定する説もあるが、一行は舟で水行するために移動し、20+10日と陸行一月の邪馬台国

に向かうために伊都国（一大率）から港を目指しているの南方向に向かうとするのは無理がある。



・水行は夜間の移動はしないし、天候により港に避難することがある。立ち寄った港は多数あるだろうし、日数だけを報告した。使者らは日数を距離に換算できなかったの、別に不思議ではない。

・上陸地は古道に近い但馬国と想定して、そこから畿内までの陸行は山道もある。馬車も牛車もないので移動は徒歩のみであり、その上荷車を引いていた可能性もあり、歩測どころではなかったの、日数だけを報告したのだろう。

・魏の使者の訪問季節

倭国の風習や景色は、魏の使者によるものではなく、それまで、またはそれ以降の倭国訪問者によるものが大であるので、その情報によって魏の使者の訪問季節を特定することは出来ないだろう。だが常識的には寒い時期は避けるはずなので、春の後半から秋の前半の間で潮の流れの良い時期に訪問したと考えられる。

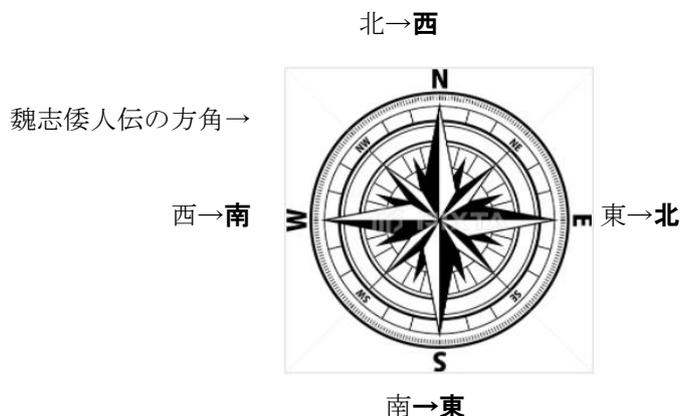
## 7. 結論

○倭国内での方角誤認

・使者たちは、東北東の方角を南東と誤認している。約 60~70 度の誤認である。

・使者たちは過去の情報により、また倭国の偽情報も想定され、西日本は南側に広がっていると誤認しているので、更に 30 度の誤認が加わり、列島が約 90 度南転していると誤認し、邪馬台国への道のりを報告した。従い、魏志倭人伝の倭国内の方角は全てその誤認分 90 度を修正して読み変えればよい。

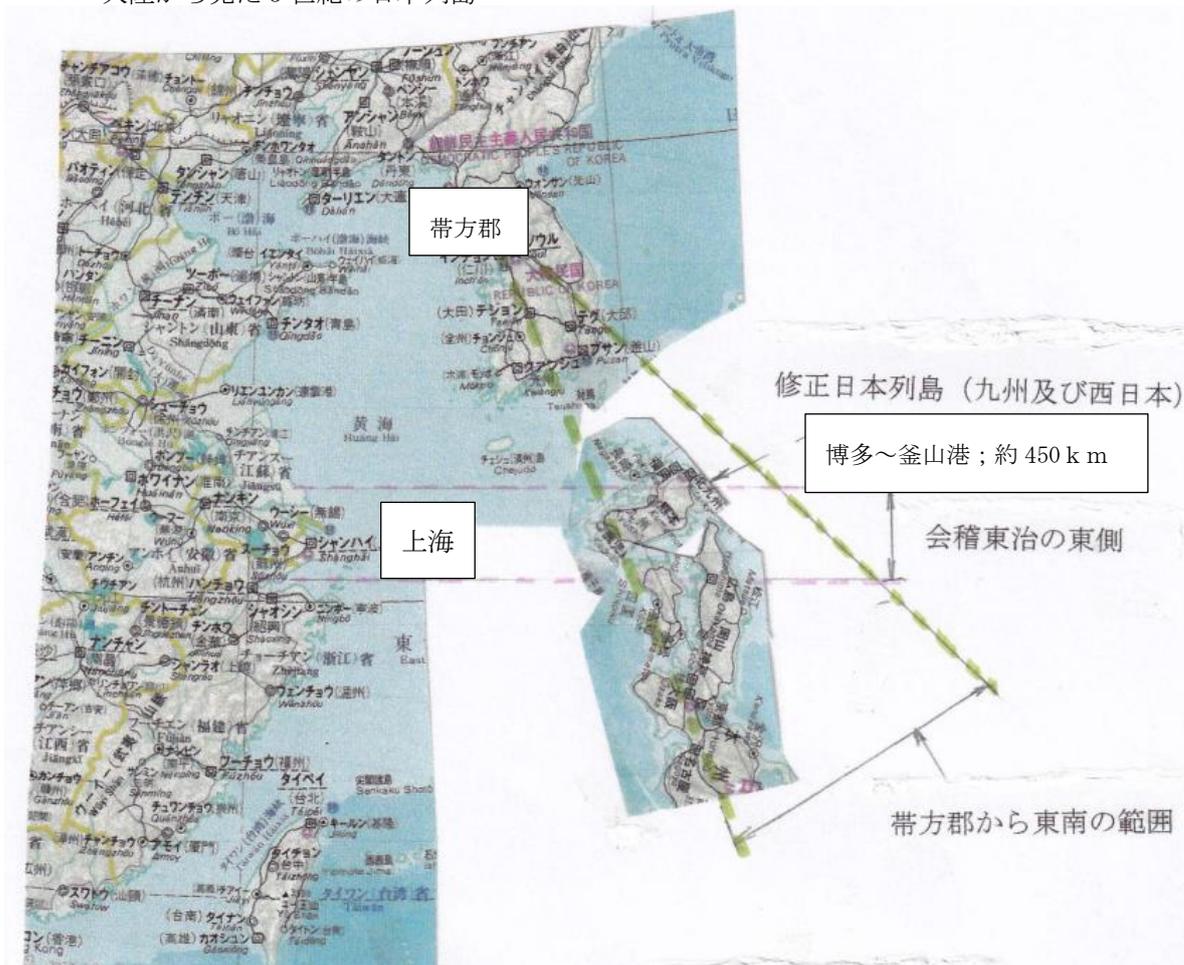
大陸と倭国その他の方角はほぼ合致しているようである。

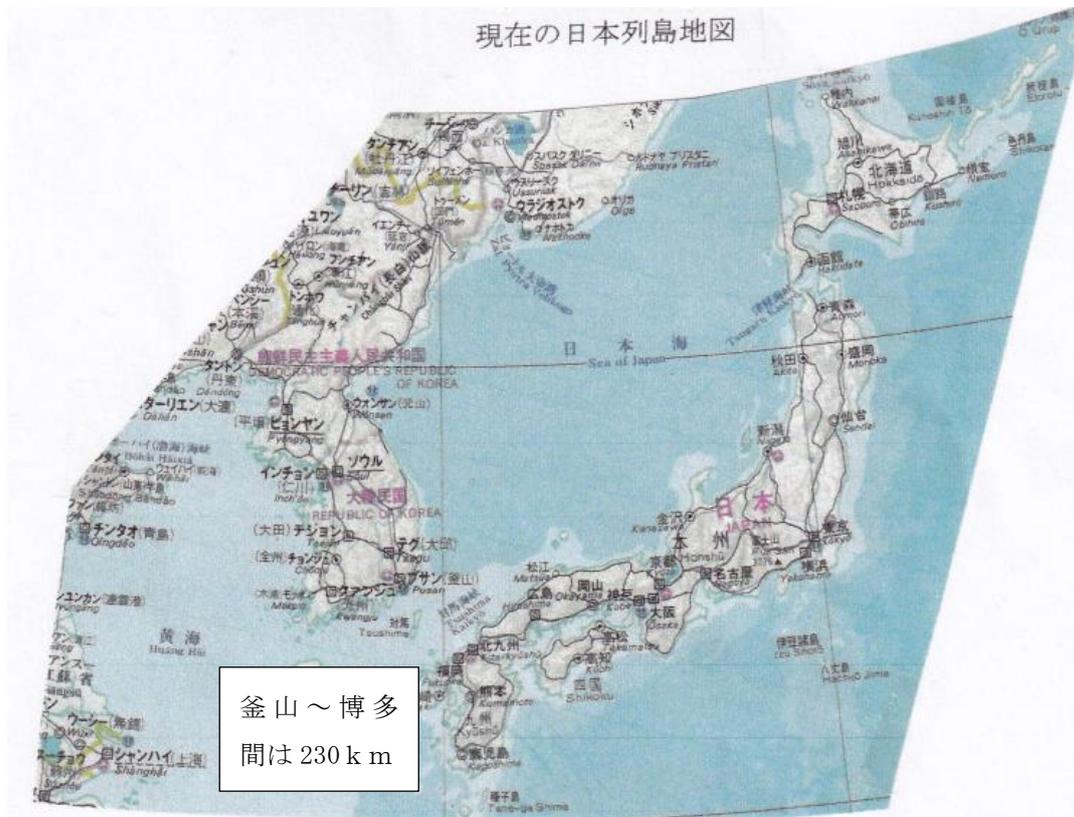


### ○3 世紀における大陸の日本列島の姿の誤認

- ・倭国は帯方郡の南東に位置する。当時の倭国は九州と西日本であろう。
- ・彼らの算出した半島と北九州の距離より推定して、倭国は会稽郡東冶の東側に位置するとしたのだろう。陳寿はそれを書き入れただけだろう。

大陸から見た 3 世紀の日本列島





### ○魏志倭人伝の方角の修正（読み替え）

使者らは方角を約 90 度誤認しているので、魏志倭人伝の方角は現在の地図上をベースにすると次のように読み替えることが必要になる。

- ・伊都国は末ら国の東南 5 百余里→北東（東北東）
- ・奴国は伊都国の東南百里→北東（東北東）  
奴国は春日市や福岡市辺りである。一行は港を目指していたので、奴国内の海岸に近い東北東に向かったとしてもおかしくない。
- ・東行百里不弥国→北行不弥国  
不弥国は比定されていないが、一行は港を目指しているのので、奴国で宿泊した後、北部の不弥国の港を目指したと想定する。今後の研究を待つことになる。
- ・南、投馬国→東、投馬国
- ・女王国の以北に一大率を置き、伊都国に治す→西（畿内の西で合致する）
- ・女王国の東、海を渡る事千余里、侏儒国→北とすると隠岐の島が候補

このように方角の誤認を修正すると、使者らは近畿地方に到達する。戸数 70,000 余を考慮すれば、素人的には女王の宮室候補は畿内の纏向遺跡の大型建物とほぼ断定しても良いと思うが、専門家に実証して頂きたいと思う。角度を 90 度修

正すると、多くの記述の辻褄が合ってくる。(「邪馬台国論争における日本列島認識問題」参照)

王国は西から、都を遷しながら、畿内に到達した可能性もあり、王権が交代し、とその都が複数あった可能性もある。しかし、魏の使者が訪れずれた女王卑弥呼の都は一つであり、それは畿内であろう。しかし、考古学的には検証しなければことが多々残っているようだ。今後の新たな発掘調査によりさらに実証されると期待する。

その他の方角読み替えは略

## 8. さいごに

日本の古代地図は江戸の初期まで「行基図」と呼ばれるものを使用していたし、現在の地図に近いものは18世紀初頭の元禄図からである。3世紀の地理認識は実際の地理とはほど遠かったであろう。

しかし、方角の誤認を除けば、使者らの報告は正しかったのである。先入感もあり、倭人のささやき等で方角を誤認したのだろう。

魏志倭人伝にはいろいろと間違いがあるとし、読み替えてしまえばキリがなく、事実とかけ離れてしまう。読み替えるくらいなら「邪馬台国論争」ではなく、むしろ「倭国王の都の変遷論」をすべきだろう。

・墓、銅鏡等、鉄鏃等の発掘物の考古学的な検証についても知りたいと思う。

### 参考文献

- ・前之園亮一著；古代史の謎
- ・安本美典著；「邪馬台国畿内説」徹底批判
- ・森浩一編；倭人伝を読む
- ・山田宗睦著；魏志倭人伝の世界
- ・蛭田喬樹著；「倭人の行程」
- ・山田宗睦著；魏志倭人伝の世界
- ・ウィキペディア

以上